

ソラメ(ハウス・露地)

作 型	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
ハウス	—	—	x	—	—	—	—	—	—	—	—
露地(無霜)	—	—	—	x	—	—	—	—	—	—	—
露地(準無霜)	—	—	—	—	x	—	—	—	—	—	—
露地(降霜)	—	—	—	—	—	x	—	—	—	—	—

播種 冷蔵処理 植え付け(直播き) x 主枝・収穫枝摘芯 追肥 ビニール被り 収穫

作型選定の留意事項

そらめの花や幼莢が、強い低温や降霜に遭うと、落花や落莢、異常莢を生じる。このため、種子の低温処理により開花期を早めても、マイナスになることがあるので降霜の有無・強弱等、地域性を考慮し作型を選定する。

圃場の条件

陽当たりが良く、風当たりが弱いこと
連作を避けること(4~5年の輪作)
土壌pH6.0~6.5であること
保水性・排水性がに優れること

土壌消毒の方法(連作の場合)

クロルピクリンで土壌消毒する。(20~30%/10a)
土壌消毒は、植付け予定の40日前に行う。

土壌消毒

7~10日跡に
ガス抜き(耕耘)
(2~3回)

土壌改良資材施用

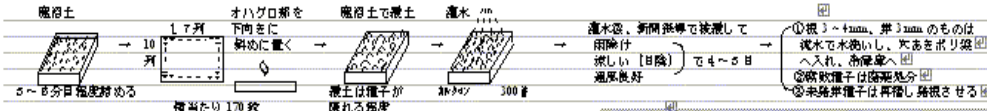
(堆肥、石灰、燐酸類)

耕耘

播種および催芽

品種および播種量 : 陵西一寸、唐比の春 8%/10a

催芽時の必要資材 : 水稻育苗箱またはトコ箱9箱/10a、鹿沼土4~5箱/10a



低温処理と馴化

催芽処理したものを、2~4日 で3~4週間低温処理し、花芽分化を早める。
冷蔵庫から出庫後、一夜涼しいところに置き、翌日直播きする。

本圃の準備

防風対策の徹底。

植え付けまでの各作業は早めにとりかかる。

マルチはハウス栽培ではミラーマルチを、露地栽培ではシルバーマルチを使用する。

30日前まで

防風ネット・防風垣の設置、完熟堆肥、石灰燐酸類の施用

7~10日前まで

基肥、土壌処理剤使用・畦立て(高畦) 一雨待つ マルチ

0日

植え付け

施肥基準 施肥基準(露地栽培の場合)(10aあたり)

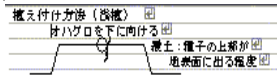
	基肥 kg	追肥 kg
完熟たい肥	2,000以上	
ミネリンパワー	100	
B化成S1号	100	
NK化成2号またはC3号		40
N-P-K = 18.4-19.0-18.4		

ハウスの場合、ハウスの場合の追肥は樹勢を見ながら施する。

植え付け

植え付け時期は、施設の有無、降霜

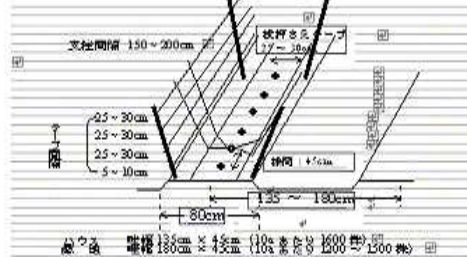
の有無・程度により決定する。



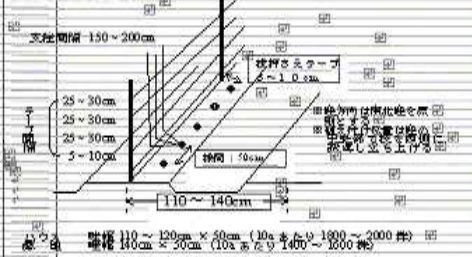
栽植密度と仕立て・誘引方法

U字4本仕立て

U字4本仕立て



L字3本仕立て



植付け後の管理

主枝の摘芯 : 本葉4~5枚になったら主枝を摘芯し、主枝を横倒しにして針金等で固定し、風害を防止する。揃いの良い側枝がU字仕立てでは4本、L字仕立てでは3本確保できたら、主枝を摘み取る。

腋芽の除去 : 腋芽は、伸びすぎず、混みすぎないうちに、早めに除去する。

整枝・誘引 : 支柱を1.5~2.0m間隔に立て、誘引テープを3~4段張り、収穫枝の日常当たりが良くなるよう枝間隔をとりながら誘引する。風が強いところでは、誘引テープの間隔を狭くする。

摘 莢 : 1節1莢を基本とする。曲り莢、1粒莢は早めに摘除する。

収穫枝の摘芯 : 着莢節数は12節前後とし、最終着莢節の上に5節程度残して摘芯する。

灌 水 : 植え付け後、生育初期および着莢期以降は特に乾燥に注意する。

ハウス栽培では灌水チューブを設置する。

換 気 : ハウス栽培では高温管理にならないよう換気を行う。

保 温 : 降霜や低温が予想される場合は、べた掛け等による保温、霜害防止をはかる。

葉面散布 : 樹勢維持のため生育初期にマルチ青を葉面散布する。ハウス栽培では

しみ症防止のため石灰(カルクレン等)の葉面散布を行う。

追 肥 : 着莢期から収穫期前にかけてNK化成を1回10aあたり20kg(N約3kg)

を通路に施する。

収穫

莢が下向きに垂れて、背筋が黒褐色になり、種子の形状が外観上明瞭になった頃を収穫期の目安とする。

「おはくろ」部が黒くなる前に収穫する。

12~3月までは未熟莢に、4~5月には老朽莢にならないよう収穫する。

病害・生理障害等対策

病・障害名	発生原因と対策
種子の腐敗	高温期の催芽処理時に発生がみられる。播種後の灌水時に、カルクレンの300~400倍液を散布する。
しみ症	ハウス等とくに早播きの作型で、高温・小雨時に発生がみられる。石灰欠乏が主因のため、土壌の乾燥防止、石灰の適正施用を心掛けたともに、石灰の葉面散布(カルクレン等)を行う。
リング症	結莢後、低温(1~2℃)にあつた発生が多くなるため、低温・降霜が予想されるときは、保温・防霜等の対策をとる。
異常莢(曲り等)	英間の養分競争が主因とされる。摘莢や受光態勢の改善をはかる。
ウイルス病	主にアブラムシにより伝搬される。初期防除に努め、発病株は蔓延防止のため早めに抜き取る。種子の更新は、発生防止上、非常に有効である。